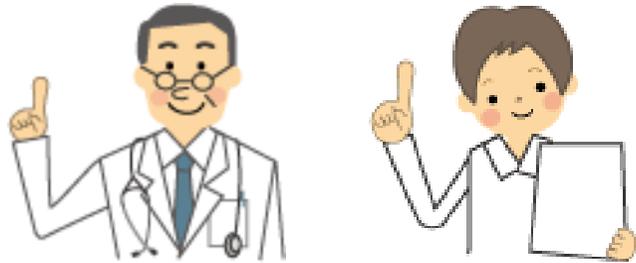
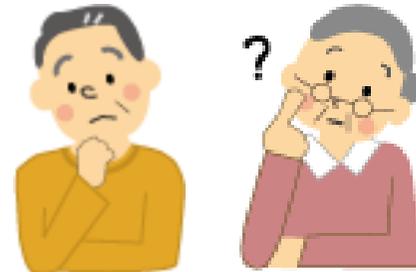
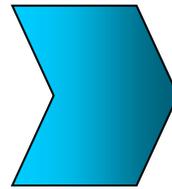


理解しやすい服薬指導を目指して

外用薬の情報用紙に加えて患者の理解力に応じた説明や補足が必要となる。そのため、説明や補足において、薬剤師の知識や経験を活かした服薬指導が行われる。



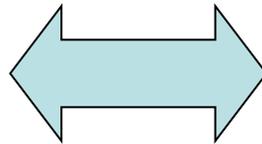
医師・薬剤師から使い方の説明を受け、理解したつもりでも…



実際使ってみて、不明な点も出てくる

画一的な情報用紙

薬剤師側の背景 {
・知識
・経験 etc.



患者側の背景

{
・年齢
・障害
・理解力 etc.

個別に対応しつつ均質な服薬指導が必要

患者さんからよく受ける質問

日頃、患者さんがどのような疑問を感じているのか調査を行った。

(平成22年6月～8月、当薬局にて)

～うがい液～

- ・1本で何日使えるの？
- ・作り置きしてもいいかな？
- ・なかなか出てこないよ。

～点耳液～

- ・冷蔵庫にしまったほうがいい？
- ・横になっていられない。

～貼付剤～

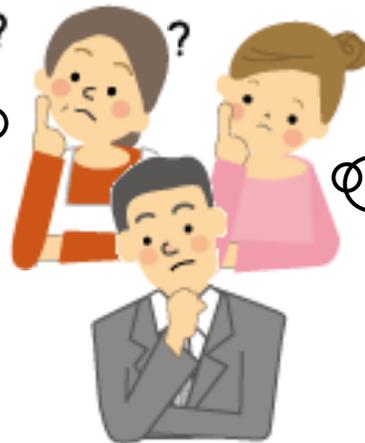
- ・剥がれちゃったらもう一度貼っていいかな？
- ・いつ貼ればいいかな？

～点鼻薬～

- ・良くなったらやめていいの？
- ・以前もらったものを使ってもいい？
- ・上手に使えないよ。

～点眼液～

- ・1回に何滴使えばいいの？
- ・コンタクトの上から使っても大丈夫？
- ・2種類以上点すときは？



目的

個別に対応しながら均質な服薬指導とすることを目的に、外用薬の服薬指導に用いる情報の要点を薬局内で統一化し、表現方法等を共有する方法を検討した。



方法

要点の確認

製薬企業から提供されている外用薬の使用方法などに関する情報用紙の見直し

患者背景の確認

よく受ける質問の集計

医師への確認

処方意図・考え

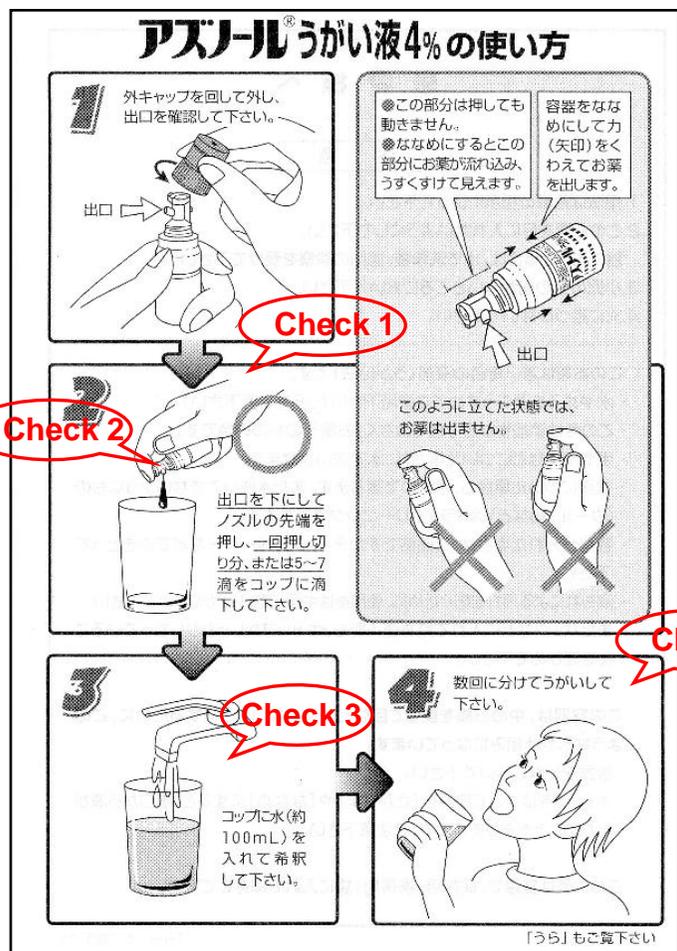
薬剤師の知識・経験

情報用紙を収集し、使用方法などの情報を整理
要点を整理した指導マニュアルの試作

指導マニュアルの有用性の検証

マニュアル例1:うがい液(アズノールうがい液4%)

~患者使用説明書~



Check 1:うがい液の滴下

しっかりと頭を下に下げて、先端を押しすること。イソジンなどと異なり、ボトルを押してもお薬は出てきません。

Check 2:うがい液の滴下

出口付近は汚れやすいので、手や衣服につけてしまわないように注意。ただし、水で洗うことで容易に落ちます。

Check 3:うがい液の希釈

1日3~4回行う場合、うがい液5,6滴に対して約100mLの水で希釈する。回数を多く行う場合、もう少し薄く希釈して使用する。

Check 4:うがい方法

- ・基本的なうがい方法は「がらがら」「くちゆくちゅ」であるが、『舌の荒れ』や『口内炎』治療を目的に処方されている場合は、口腔内に薬液が行き渡るように「くちゆくちゅ」うがいを強調する。
- ・泡立ちやすいので口に含みすぎないこと。

~Q&A~

Q1. イソジンは使ったことあるけど、違いは？ → A1: イソジンは殺菌的に働き、アズノールは炎症を抑える働きがあります。

Q2. 飲み込んでしまったら？ → A2: 体に害はありませんので、安心して下さい。

Q3. 作り置きしたらだめ？ → A3: 雑菌などの繁殖が考えられるので、使用するたびに薄めて作成して下さい。

指導マニュアルの有用性の検証1

事例：患者の質問に対応した例

- ・処方：アズノールうがい液4%
- ・患者背景：主に高齢者
- ・質問：アズノールうがい液が出てこない

⇒ 指導内容の確認：指導箋に「出口を下にして」との記載があるが、容器の傾けが足りず薬が滴下されていない場合が多数

➡ しっかりと容器の頭を下に下げて、先端を押すことを強調して指導
(マニュアルCheck1参照)

質問の要因が明確となり、的確な指導・対応へと結びついた

マニュアル例2: 点耳液

~当薬局採用点耳液~

- ・タリビット耳科用液 0.3%
- ・ベストロン耳鼻科用1%
- ・リンデロン点眼・点耳・点鼻0.1%
- ・タリザート耳科用液0.3%
- ・ホスミンS耳科用3%

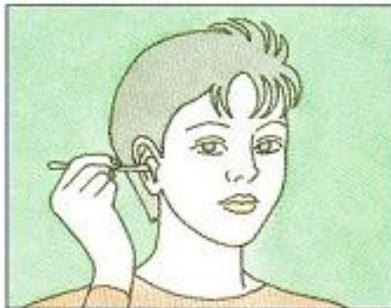
~患者使用説明書（成人用）~

点耳薬の使い方

点耳薬は悪い方の耳を上にして投与し、耳のなかに薬物がゆきわたるようにします。耳たぶを1~2回引き上げて、ゆするようになりますと、薬液を中耳にしみこみますのに効果的です。投与する際には、冷たい薬液を耳に入れますとめまいを起すことがありますので、薬液を体温ぐらいまで温めて用います。また、汚染を避けるため、点耳薬の容器の先端が直接、耳や皮膚に触れないようにして投与します。

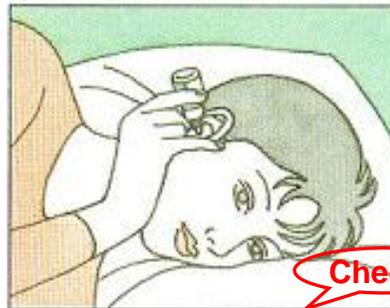
ただ、勝手に長期間、連用しますと思わぬ副作用の原因になりますので、投与期間や投与間隔はいつも医師の指示に従ってください。

また、点耳薬が効率よく患部に行くように、鼓膜にわざと穴を開けることがあります。この場合も、医師の診療指導に従っていればこわがる必要はなく、むしろ早く疾患を治す決め手となることも少なくありません。



①医師の指導に従って、棉棒で外耳道の分泌物を取り除いてください。点耳薬はほぼ体温程度に温めてからご使用ください。

Check 1



②悪い方の耳を上にして横向きに寝て、外耳道入口が水平になるよう頭の位置を決め、容器の先端が直接耳に触れないよう注意して、医師が指示した量の点耳薬を滴下してください。

Check 2



③点耳後は約10分間、そのままの姿勢で、じっとしててください(耳浴)。1日の耳浴回数は医師の指示に従ってください。

Check 3



④耳浴後、清潔なガーゼかティッシュペーパー等を耳に当てて起きあがり、耳の外に流れ出た点耳薬を拭き取ってください。

Check 4

~患者使用説明書（小児用）~

耳科用液(点耳薬)による効果的な 点耳・耳浴のやり方

監修:名古屋市立大学 名誉教授 馬場 駿吉 先生



点耳の準備

Check 1

① 外耳道の清拭

医師の指導に従って分泌物を十分排除してください。

② 耳科用液の温度を確認(できるだけ体温に近い状態で使用する。)

冷たい薬液を滴下しますと「めまい」を起こすことがありますので手で暖めるなどのご使用ください。



点耳・耳浴のやり方

Check 2

① 悪い耳を上にして、横向きに寝てください。

外耳道入口部が水平になるよう頭の位置を保ちます。

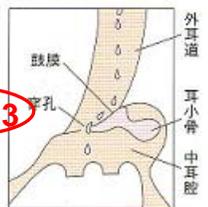
② 容器の先端が直接耳にふれないようにして耳科用液を

滴下します。(小児に対しては、適宜滴数を減らします。)

中耳炎の場合は、点耳した後、耳たぶを後上方へ引っ張りながらゆするようにしますと外耳道がまっすぐになり、空気の層がなくなり中耳腔まで十分に到達します。

鼓膜の穴が小さい時はつばを飲み込むようにすると良いでしょう。

点耳後そのままの姿勢で約10分間の耳浴を行います。これを1日2回行います。



耳浴10分間

Check 3

耳浴の終了

清潔なガーゼ、ティッシュペーパー等を耳にあてて起き上がり、耳の外へ流れ出た耳科用液を拭き取ってください。



Check 1:事前準備

耳掃除は行う必要はない。

(耳掃除を行うことで外耳道に傷をつけてしまう可能性があるため)

Check 2:点耳液の滴下

・冷たいまま耳に滴下しないこと。冷たくなってしまった場合は必ず手で暖めること(特に冬季は注意)。

・手が不自由など、ご自身で行うことが困難な場合は第三者に依頼すること。

Check 3:耳浴の時間

原則として約10分間の耳浴を行うが、乳幼児などじっとしてられない場合、1分でも長く横の体勢をとらせる。

Check 4:点耳液の量(医師の指示量)

タリビット(タリザート)に関しては1回量を2・3滴で行う。

(添付文書では、成人に対して6~10滴、小児に対しては適宜滴数を減ずる) (青字:医師の指導を反映)

~Q&A~

Q1. 軟膏が同時に処方されている場合の使用順序は?

→A1.点耳終了後に軟膏を塗れば、軟膏が流れてしまうことはありません。

Q2.綿栓は詰めたほうがいいか?

→A2.自宅で行う場合は特別必要ありません。

指導マニュアルの有用性の検証2

事例：医師の指導に対応した例

- ・処方：点耳液（タリビット耳科用液0.3%）
 - ・患者背景：小児（母親による管理）
外耳道の炎症（痒み）にて受診
 - ・初回指導：指導箋に従い、点耳液を使うよう指導
（マニュアル作成前）
 - ・再診時医師より報告：母親が一生懸命に耳掃除をして、
外耳道が傷だらけになっている。
- ⇒ 指導内容の確認：指導箋に「外耳道の清掃」の記載あり
- ➡ 指導箋の文章を削除し、耳掃除をし過ぎないように指導
（指導マニュアルにも反映）

以降、点耳使用後に点耳使用に関するトラブルの発生なし

考 察(1)

- 情報用紙を見直すことで、指導上不必要な点もあることが判明した。
- 患者の疑問点は、説明上要点となりやすい。
- 添付文書上、情報用紙上の用法だけではなく、処方医師の意図を反映させる説明が必要であるので、医師との十分なコミュニケーションが必要である。
- 指導マニュアルの作成により、薬剤師間での説明方法の共有化を行うことが可能となった。

考 察(2)

- 用法の理由を添えた説明を検討することは、患者とのコミュニケーションやアドヒアランスを向上することに役立つと考えられる。
- 新人薬剤師や6年制実務実習での服薬指導マニュアル作成への可能性が併せて示唆された。
- より良い服薬指導の展開は薬剤師業務水準の全体的な向上につながり、患者の治療効果の向上に寄与し得る。

結 語

要点をまとめた指導マニュアルの作成は、服薬指導に用いる表現方法を薬剤師間で共有することが可能であることが示唆された。

このことは、より良い服薬指導への展開へとつながり、患者の治療効果の向上に寄与していることが期待できる。